

【No.1】AIによる赤潮予測システムの開発に向けて研修会を開催しました!【担当:浅海干潟研究部、企画情報室】

事業名:赤潮対策緊急支援事業(R7.2 補正)

概要:6月16日に、「AIによる赤潮予測システムの開発※」に向けて、新たにシステム開発・研究に携わる独立行政法人国立高等専門学校機構 熊本高等専門学校(以下「熊本高専」という。)の生徒に対し、赤潮の生態等に関する講義を行いました。生徒からは、赤潮プランクトンの増殖スピードや出現パターン等、システム構築や条件設定に関する質問があり、出席者で活発な意見交換となりました。今後もシステム開発状況等について定期的に意見交換を実施していきます。



写真① 赤潮に係る講義の様子

※令和6年度(2024年度)に(株)マイスティア、熊本高専及び海水養殖漁協が本県立会の下、赤潮研究に係る包括連携協定を締結しており、その一環として取り組んでいる。

【No.2】赤潮被害の軽減が期待される餌を用いた養殖現場試験について養殖業者への現地説明会を開催しました!【担当:養殖研究部、企画情報室】

事業名:赤潮総合対策試験

概要:当センターでは、国立研究開発法人水産研究・教育機構 水産技術研究所が開発中の有害赤潮による養殖魚への漁業被害を軽減するための餌(改良餌料)を用いた現場実証試験を実施しています。試験は、7月2日から開始しており、7月16日には、上天草市龍ヶ岳町高戸地先の魚類養殖場にて地元養殖業者を対象とした現地説明会を開催しました。なお、本試験は9月末までの実施を予定しています。



写真② 現地説明会の様子

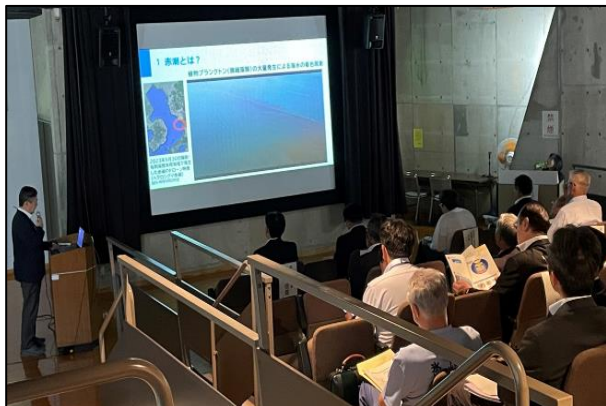


写真③ 改良餌料の説明の様子

【No.3】「海の再生及び環境対策特別委員会による赤潮対策に係る現地視察対応」及び「本県における赤潮対策の取組状況報告会」を開催しました!【担当:水産局等】

事業名:赤潮総合対策試験

概要:7月22日に特別委員会による赤潮対策に係る現地視察への対応、7月24日には熊本県における赤潮対策の取組状況に係る報告会を当センターで開催しました。視察対応及び報告会では、板倉特別研究員による「本県の赤潮発生状況と対策について」の講演の他、漁業調査船「ひのくに」による海上視察及びセンターの施設見学を実施しました。今後も当センターでは、赤潮対策に係る試験研究を効率的・効果的に推進していきます。



写真④ 板倉特別研究員による講演



写真⑤ センターの施設見学の様子

その他の取組み【No.4~No.8】

【No.4】ノリ養殖業を題材としたドキュメンタリー映画「ウミノヲヤ」上映会及び「水産関係職員研修会」を開催しました!【担当:企画情報室】

事業名:水産業広報・研修事業

概要:本県のノリ養殖業を題材としたフランスのドキュメンタリー映画「ウミノヲヤ」の上映会及び水産関係職員の研修会を6月13日に当センターで開催しました。本映画では、ノリ養殖業の発展に尽力したドゥルー女史の功績や人工採苗技術の確立に係る歴史、近年のノリ養殖業を取り巻く状況等などが描かれており、水産関係職員としても、ノリ養殖業を広く学ぶことができる貴重な研修の機会となりました。



写真⑥ 上映会及び研修会の様子



写真⑦ 上映会に併せて来日されたシャルドロネ監督

【No.5】熊本県立天草拓心高校マリン校舎と連携したオープンラボ実習等を開催しました！

【担当：食品科学研究部、企画情報室】

事業名：未来の漁村を支える人づくり推進事業、水産物付加価値向上事業

概要：当センターでは今年度、県内唯一の水産系学科を有する県立天草拓心高校マリン校舎（以下、「マリン校舎」という。）と連携し、水産業や水産加工業等に対する理解を深めるとともに、将来的な担い手の育成・確保に繋げることを目的とした取組みを進めています。6月16日には、当センターのオープンラボ※を活用し、マリン校舎が作成した未利用魚を活用したレトルトカレー（試作品）の細菌検査や水分活性の測定等を実施しました。また、当センターの施設見学や本県水産業に関する講義も行い、生徒は食品衛生や本県水産業への理解を深めている様子がうかがえました。

※県内漁業者及び加工業者を対象に、当センターの研究室を開放して、加工品試作や自主衛生検査等のために利用できる取組み。



写真⑧ 細菌検査の実施状況



写真⑨ 施設見学風景

【No.6】アサリ・ハマグリ の分布量一斉調査を行いました！【担当：浅海干潟研究部】

事業名：重要二枚貝資源モニタリング事業

概要：浅海干潟研究部では、本県の主漁場である菊池川及び緑川河口域におけるアサリ及びハマグリ の分布量一斉調査を6月及び8月（予定）に実施しています。調査では、菊池川河口域45定点、緑川河口域90定点において、方形枠等による枠取りを行い、両貝類の個体数や殻長等を測定しています。これらの調査結果に基づき、長期的な生息動向の把握を行い、現場での資源管理指導に当たっての基礎データとして活用しています。



写真⑩ 一斉調査の実施状況



写真⑪ 枠取りで確認されたアサリ稚貝

【No.7】ガザミの種苗放流試験を行いました!【担当:資源研究部】

事業名:有明海・八代海再生事業

概要:資源研究部では、有明海の特産魚介類資源(クルマエビ・ガザミ)の回復に向けて、効果的な種苗放流試験を実施しています。6月に、熊本市熊本港地先及び長洲町地先において、ガザミ(C1サイズ種苗:全甲幅長約5mm・178.4万尾、C3サイズ:全甲幅長約10mm・20.5万尾)を放流しました。なお、放流にあたり、今年度は調査船「あさみ」を活用した海上輸送も実施し、輸送時の放流種苗への損傷低減を図っています。今後は、漁獲されたガザミのDNAを調べることで、放流効果の把握を行っていきます。



写真⑫ 放流したガザミ(C1サイズ)

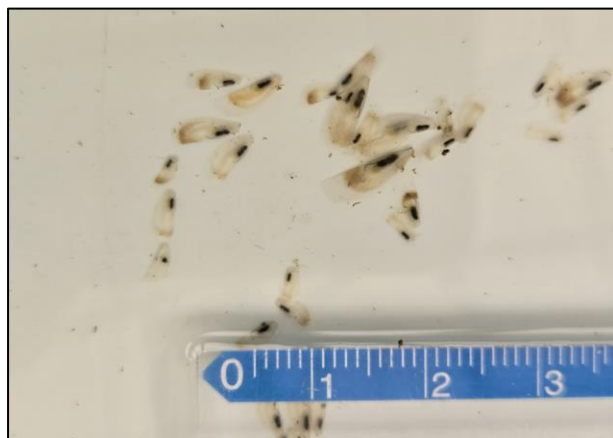


写真⑬ 放流の様子

【No.8】タイラギの中間育成試験を行っています!【担当:浅海干潟研究部】

事業名:有明海・八代海再生事業

概要:本県では、国及び有明海沿岸3県(長崎県、佐賀県及び福岡県)と協調し、3県が種苗生産したタイラギ着底稚貝を豪雨等による海水の塩分低下のリスクが低い当センターで育成し、再び3県へ還送する「中間育成預託システム」に取り組んでいます。7月15日には、長崎県から稚貝(約2万6千個体)を受け入れ、現在はカラム水槽を用いて殻長30mm程度までの育成を目指しています。今後は、11月頃を目途に50mm程度まで育成を行い、稚貝を各県へ還送するとともに、一部を母貝団地として県内漁場においても継続飼育を行う計画です。



写真⑭ 受け入れたタイラギ稚貝



写真⑮ カラム水槽による飼育状況